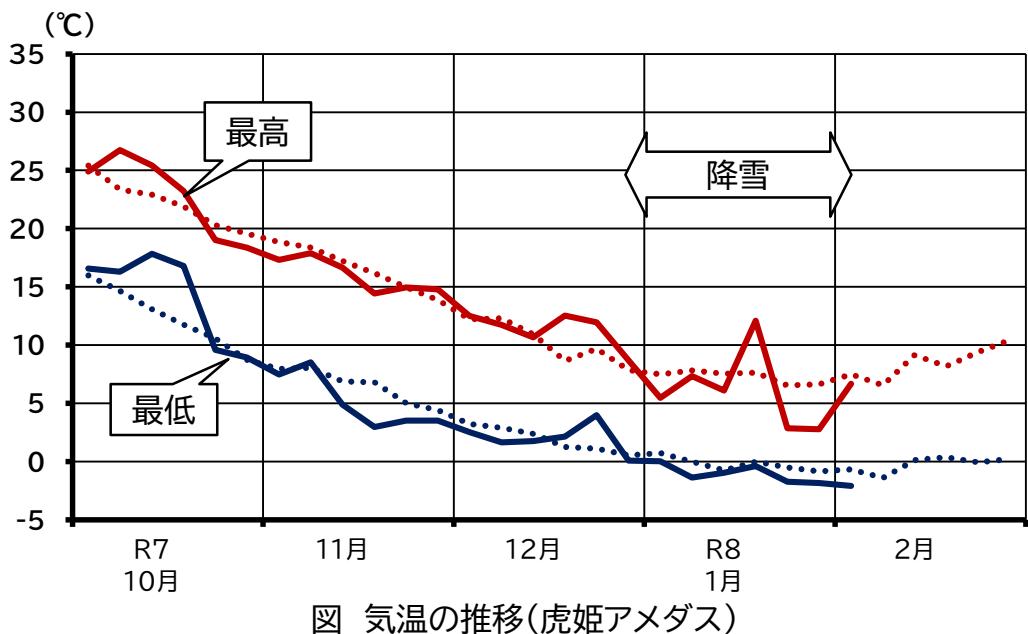


排水溝の点検・補修を！ 「びわほなみ」の穂肥適用時期を迎えます！

1. 気象および麦類の生育状況

11月～1月中旬の気温は平年並～やや低く推移し、特に12月下旬～1月下旬の断続的な積雪により、生育が停滞しています。特に遅播きほ場では、播種後の低温や積雪により生育は遅れています。



2. 排水対策(大麦・小麦)

麦類は分けつ確保に重要な今の時期に湿害を受けると、茎数が十分確保できず、収量・品質の低下を招きます。今作は特に積雪が多いため、融雪の際に排水口(尻水戸)周辺が浅くなり滞水していないか、溝が泥やワラでふさがっていないか点検し、滞水している場合は溝さらえ等を行い、速やかに排水しましょう。

排水対策は根の活力を維持し、穂肥をしっかり効かせるための大作業となります。



排水溝がふさがって滞水。
溝さらえが必要。

3. 収量確保に向けた穂肥(小麦 びわほなみ)

「びわほなみ」の収量を高めるためには、排水対策により茎数を確保したうえで、穂肥をキッチリ施用し効かせることが重要です。

2月中下旬 (主茎長が2cm程度の時) に穂肥を施用しましょう。施用量が少ないと減収したり、施用時期が遅れると穂数減少や遅れ穂の発生リスクが高まります。積雪がある場合は、融雪後、排水対策を実施したうえで速やかに施用しましょう。



↑主茎長 2cm

《穂肥施用例》

パターン①

【基肥】麦用セラコートR2500
または 国産化成肥料444
(5.6~7.5kgN/10a)
の場合

【穂肥】麦用セラコート R2500
40~50kg/10a(現物)
(合計 17.5~18kgN/10a)

パターン②

【基肥】麦パンチ(14kgN/10a)
の場合
【穂肥】麦用セラコート R2500
20kg/10a(現物)
(合計 19.0kgN/10a)

※基肥と穂肥以降の施肥を加えた合計窒素施用量を
18~19kg/10a とすると収量が高くなる事例が多い

4. 雜草対策

収穫期にカラスノエンドウやタデ類等の広葉雑草が多いと、収穫の障害となったり、収穫物に混入して調製に支障をきたします。既にカラスノエンドウ等の幼植物が発生しているほ場も見られます。ほ場の雑草の生育をよく観察し、発生状況に応じて3月上旬(麦で条間が隠れる前)には除草剤を使用して防除してください。

★「びわほなみ」の栽培にあたっての留意点

- ①生育不良とならないように排水対策を徹底し、湿害の発生を防ぐ。
- ②適期播種のほ場では、2月中旬の穂肥で収量の確保を図る。
- ③4月の止葉出葉期~穂揃い期の生育をよく観察し、葉色の低下等がみられた場合は、出穂7日前および出穂10日後の追肥(N単肥可)を施用し、収量低下の防止、たんぱく含量の向上を図る。
- ④雑草防除は、播種期から生育期まで体系的に畦畔、ほ場周縁部を含めて、除草剤処理を実施する。